

# 人生の模範成長促す

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

## 第5部 先進地に学ぶ 〈4〉

### 荒川区「子ども村」

東京都荒川区の東部に位置する荒川区、2年前の2014年5月、中学生の保護者「子ども村」が、中学生ホッパラー・ホッパラーができた。区内の民生委員や児童・青少年委員の有志メンバーが、区社会の助成を受けて運営。家庭の事情などで夜遅くまで一人、留守にする子どもたちを週一回、学習支援のほか食事提供や生活支援をしている。

まっただ中高生への学習支援の活動だった。学習機会を奪われるのはよかつたが、成績不振の子の多くが小学校でつまずきを取り戻せず、学校ごとを諦めていた。昼夜逆転の生活をしていたり、食事を取っていないが、人とは違って話せない、なな多様な問題を抱えていた。

「中学校の勉強についていけない子や学習以前の生活面の問題を扱えない子、経済困難の子たちに寄り添い、フォローする仕組みが必要だった。代表の村みさ子さんは振り返る。

活動日は10、70代の約30人が夕食の食卓を囲み、雑談を楽しむ。髪型や人生の相談に答える子どももある。血縁はないが、家族のよさを褒めあつて「家族関係をソーシャルファシリテーター」と呼んでいる。

ホッとステーションに登録する中高生は現在約30人。半数の約15人はほぼ毎回参加する。ボランティアスタッフ約20人で週一回の活動のほか、秋から冬に

かけての暖かいシーズンの「目標ゼミ」、定期テスト前の土曜学習などを開いている。

例として、勉強が表れ始めている。通い始めたところ他者と会話が多くなった中学生はホッパラー・ホッパラーと開きあがり、明るく会話できるようになった。大村さんは「子どもは自分の思っているロールモデルを見つけて、将来に希望を持つるようになった」と手応えを感じる。

開所以来、子どもの「成長記録」でもある検査結果や区や学校に送りつけている。徐々に連携が深まり、区の支援や教員たちがいるかどうかが大変。そんな地域の力を借りていきたい」と、子どもたちの貧困「取材班・田嶋正徳



指板の大人と子どもが一緒に食事を囲む「子ども村」で、中学生ホッパラーとホッパラー

「地域のおばさんだからできることがいっぱいある。みんな地域の子どもなんだから、みんな支えてほしいよ」と、そんな言葉が聞かれる。大村さんは「貧困家庭の子は、環境がすべて大人になることで変わる。子どもが子どもでいられた場所を保障したい」と開所運営の考え方を語る。「ちゃんと、子ども時代、を過ごすことが、ちゃんと大人になる」と。

「子どもでもいられる場を保障」